

『CHOPIN(ショパン)』 2006 年 4 月号

そのころ、そのとき 思い出に残る音楽との出会い

〈そのころ〉あるいは〈そのとき〉 みなさんはどのように音楽と出会い、あるいは向かい合い、かわり合っていたのでしょうか？

「良い戦争と悪い平和はない」

萩谷由喜子著『田中希代子』

私は、月に2、3回、八重洲ブックセンターに足を運び、特に、歴史、思想を扱っている4階で、新刊書などを探索するのを通例としている。そこで、なぜか、『田中希代子』が並んでいるのを発見し、懐かしい人に節する思いで、短期間にこれを読破した。著者は萩谷由喜子さんだ。

田中さんは、女子高等師範付属小学校の1年上級生だ。そのころすでに、ピアノが抜きんでてうまい人だという印象を、幼いながら、強く持っていた。音楽の時間に、担当の先生がいらっしゃらなかったのだったか、田中さんがピアノを弾いて、みんなで合唱したこともあった。そのひとつが『朧月夜』だったことを、60年経った今も、不思議に覚えている。「菜の花畠に、入日薄れ」に始まる歌は、今歌い直しても、叙景歌の傑作ではないかと思う。

懐かしい小学唱歌

議員をやっていると、後援会の人たちとバス旅行会をやることが多い。バスの中でカラオケ大会も始まる。私は、今流行っている歌をまったく知らない。その代わりに、小学校時代、みんなで楽しく歌った懐かしい小学唱歌を歌う。春は『朧月夜』(菜の花畠に入日薄れ、見わたす山の端霞ふかし)、夏は『我は海の子』(我は海の子白波の、さわぐいそべの松原に)、秋は『紅葉』(秋の夕日に照る山紅葉、濃いも薄いも数ある中に)、冬は、ぐっと軽く『お正月』(もういくつねるとお正月)などだ。小学校のとき、ずば抜けて背の高かった私に、若干のからかいもあって歌った『ふじの山』(あたまを雲の上に出し、四方の山を見おろして)もこれに入る。この作詞者巖谷小波の旧住宅が我が家のすぐ側にあるのも嬉しい。童謡といってよい『あめふり』も登場する。母親への愛情(あめあめふれふれかあさんが、じゃのめでおむかえうれしいな)と、友への優しい気持ち(あれあれあのこはずぶぬれだ……ききみこのかさしたまえ……ぼくならいいんだかあさんのおおきなじゃのめにはいってく)が、北原白秋の素朴な歌詞からにじみ出てくる。うっとりとして唱和してくれる。中には昔の思いがよみがえるのだろうか、涙ぐむ人もいる。このときだけはカラオケの雰囲気、

がらっと変わる。そんなとき、不思議に田中さんの面影が浮かぶ。周りの人に、天才ピアニスト田中さんのことを同窓生であることの誇りを込めて話す。中に、田中さんを知っている人もおり、本当に嬉しくなる。

あのころの小学唱歌には、心にしみいる歌詞、これに色をそえる明るい、軽やかなメロディーが多いのに驚かされる。幼いころに音楽を通じ情操を高めることの意義の大きさを改めて痛感する。だから今、小学唱歌、童謡を歌うグループに入れてもらっている。

学童疎開の時代

私たちが、小学唱歌を楽しく歌い、穏やかな日々を送っていたとき、日本は確実に、誤った方向へ一歩一歩あゆんでいた。昭和19年、小学校6年のとき、ついに強制的な学童疎開が始まった。下級生のとき、いも掘りに打ち興じていた東京都小平市が疎開の場だ。小学生の歌も、急速に軍歌調に変わっていった。真上の上空でB-29に日本の戦闘機が体当たりし、B-29は真っ二つになり、日本の戦闘機もそのまま墜落した。

「良い戦争と悪い平和はない」、これは米百ドル紙幣の肖像となっているベンジャミン・フランクリンに言葉だ。卒業のため東京に帰ったその日、東京は初めて、本格的焼夷弾爆撃を受けた。世にいう3月10日の大空襲だ。帰るべき家が焼かれ、迎えに来るはずの家族に会えない友もいた。この体験とベンジャミン・フランクリンの言葉はしっかり重ね合わせていかなければならない。平和でなければ、芸術の振興も、社会保障の安定もないことを私たちは銘記すべきだ。

そのころ、田中さんはやはり苦しい疎開先の生活の中で、ピアノの芸域を広めておられたことを『田中希代子』で知った。疎開先の若い女性が、「わあ、すごい！ほんとみたい！」といったエピソードは、田中さんの芸域が、ピアノの専門家でない人を含め、心の底を揺さぶるものであることを如実に示している。

小学校を卒業するときは、まだ旧制であったため、すぐ隣の男子の高等師範附属中学に進んだ。この学校は、戦争末期の昭和20年、「敵国」スポーツ、野球をやっていた。空襲警報が鳴れば、防空壕に入り、解除になればまた練習をする。当時の野球部長は「いずれ戦争は終わる。そのとき野球は本当に楽しいスポーツで復活する。続けなさい」と言われたそう。国立でこのような方針を貫いた学校を卒業できたことに、私は密かな誇りを持っている。

このためもあってか、復活第1回の全国中等野球大会(いわゆる甲子園大会)で、東京大会優勝、全国大会では準優勝まで進んだ。このとき、阪急電車の中で、若い女性が抱きつくように近づいて、ポロポロ涙を流された。「私は東京女子高等師範の卒業生だけれども、あなたたちの学校の制服は、もう二度と見られないと思っていた。平和は嬉しい」としみじみ語られた。

日本をよみがえらせた天才たち

その後、中学、高校、大学と野球ばかりに打ちこみ、「キャッチャー人生10年」を送り、昭和30年

実社会に入ってから、大蔵省、国会議員として、その分野で、ひたすら公に尽くすことを目指し、ひた走りに走ってきた。田中さんとの距離、生きる世界も大分遠くなっていた。しかし、田中さんに
関する情報は、広くニュースなどで世間に知れわたり、私はそのたびに、田中さんは遠い世界の
人ながら、懐かしく、誇らしく受けとめていた。昭和 27 年のジュネーブ国際コンクール最高位、数
度にわたる帰国演奏会での賞賛、特に、皇太子妃美智子妃殿下の受けられた感銘など。これは
すべて、田中さんが人生をピアノにかけた結晶であり、当然のことと思う。

日本は敗戦により、自らの自信を喪失し、打ちひしがれていた。それをよみがえらせたのは、水
泳の古橋広之進、ノーベル賞の湯川秀樹、ピアノの田中希代子などである。

いつのころか、小学校のクラス会を 2 年に 1 回開くのが慣例になっていた。そんなとき、田中さん
の話もよく出た。難病にかかれ、普通りの活動ができなくなったこと、その中で、後進の指導に
当たっておられることなど。そしてついに、平成 8 年天才ピアニストとして惜しまれつつ、今からみ
れば、早い人生を閉じられた。淋しい。かつて田中さんの演奏を心から愛した美智子皇后陛下が、
御所の庭でつまれた花をそえて、「悲しみでいっぱいです」というお気持ちを伝えられたことを、天
にある田中さんが静かに受けとめていられると思い、せめてもの慰めとしたい。

著者との出会いと期待

よく出版社から読後感を聞かれることがある。『田中希代子』について、シヨパン社に「私は幼い
ころの田中さんを知っています。とてもよい企画をされたと思います」と感想を述べた。そうしたら
萩谷さんから手紙をいただき、それに応える形で電話をさし上げた。萩谷さんの手紙には、「孤独
な資料収集をしているが、貴方のような方がいるととても励みになる」と書いてあった。併せて、
「お茶の水女子師範付属出身の幸田延とその妹さんの『幸田姉妹』も書きました」と言われた。さ
っそく読ませていただき、この明治のピアニスト、ヴァイオリニストが幸田露伴の妹であることも知
った。おつき合いを広くすることはありがたいことだ。

またマスコミから「尊敬する女性は？」というアンケートもくる。「田中希代子」と書こうと思いつつ、
同窓生ということで、やや面はゆい気がして、「津田梅子」と書いてきた。その生涯を津田塾大の
卒業生が書いている。萩谷さんが日本の誇るべき女性に、一層健筆をふるわれることを心から期
待している。